

# 産業革命期におけるスコットランド中西部地域の人口動向と地理的分布

林 妙 音

1. 課題の設定
2. 利用する史料の成り立ちと性格
3. スコットランド中西部地域の人口動向と分布 州と教区に分けて

## 1. 課題の設定

連合王国の北方に位置するスコットランドは、18世紀末から19世紀後半にかけて繊維生産、製鉄業、造船工業など多くの製造業活動が発展した結果、国内でも屈指な工業力を擁する先進地域へと成長した。スコットランドのこの時期の経済発展に関しては、いまや古典となったH.ハミルトンの著作を始め、多くの研究が多様なトピクスに注目して分析を重ねてきた。具体的には産業成長のメカニズム、産業活動の内容、そして工業化がもたらした社会経済的影響など、産業革命や工業化過程をめぐって史料分析に基づく研究が行われてきた。もとより、スコットランド地域の独自性を形作ってきた歴史過程の詳細を追う動向がスコットランド経済史研究の主流であり、誇り高き伝統でもある。とりわけ1990年代以降、連合王国からの独立を推進する政治的な動きが一段の進展を成し遂げていくにつれ、経済史の過去のいくつかの重要な研究主題をリフレッシュした上で、スコットランド独自の社会経済的発展過程を実証する論文や著作が次々と発刊され、現在に至っている。この中、本稿と類似の問題関心を持ち、同様にスコットランドの産業革命や工業化過程を研究課題としているのはC.A.ウェイトリーの研究である。1997年に出版した『スコットランドにおける産業革命』をタイトルとする著書の中で、ウェイトリーが19世紀前半期においてスコットランド域内の多くの地方で製造業活動がかつてないほどの規模と範囲で旺盛に行われていたことを指摘している。これらの地方はいずれも都市の商業発展に伴って成長を成し遂げた背景を持ち、具体的にはグラスゴウを中心都市とする中西部地方、そして首都のエディンバラ、地方都市のダンディー、アバディーン、この三つの都市を囲む周辺地域である<sup>1)</sup>。周知のことであるが、この中で最も多様な製造業活動の展開を見せ、それこそ近代的工業地域の様相を呈するようになったのはグラスゴウを中心都市とする中西部地域ある<sup>2)</sup>。本稿ではス

---

1) C.A.Whatley, *The Industrial Revolution in Scotland*, Cambridge: Cambridge University Press, 1997, pp.1-2. C.A.Whatley, *Scottish Society 1707-1830: Beyond Jacobitism, towards industrialisation*, Manchester and New York: Manchester University Press, 2000, pp.229-230.

スコットランド中西部地域を研究対象として取り上げ、スコットランド統計報告書を中心的な史料として19世紀前半期における中西部地域の人口動向と教区ごとの人口分布の実態を検討する。分析に先立って、利用史料の成り立ちとその性格や特徴について簡単に言及しておきたい。

## 2. 利用する史料の成り立ちと性格

スコットランド統計報告書と称される史料は1790年代にかけて逐次出版された旧スコットランド統計報告書21巻 *The Statistical Account of Scotland* (以下、OSA と略記) と1830年代前半期に刊行された新スコットランド統計報告書14巻 *The New Statistical Account of Scotland* (以下、NSA と略記) の両シリーズがある。OSA は1790年代にスコットランド全域33州938教区について、実施した調査事業の成果報告書である<sup>3)</sup>。この調査事業の原案を發起し、事業の進行を取り仕切っていたのは当時国会議員を務めていたシンクレア Sir John Sinclair 1754-1835であった<sup>4)</sup>。シンクレアは1790年にスコットランド教会総会 the General Assembly of the Church of Scotland の協力を得ることに成功し、各教区の牧師に質問調査票を回答してもらう形で調査事業の進行を推し進めた。質問調査票の回収、そして調査内容の編集及び出版にかかった期間はおよそ9年間であった。

1825年にシンクレアはスコットランドが置かれている現状について、再度の調査実施の必要性があることを表明した。これを受け、調査を実施する機関として新統計報告書作成委員会 Committee of the Society for the Sons and Daughters of the Clergy superintending the New Statistical Account of Scotland が発足し、委員会の運営並びに調査事業の進行で指導的な役割を担っていたのは、書記官 Secretary を務める H. ジャーディン Henry Jardine であった。18世紀末の調査と同様に、今度の調査も教区牧師に調査票の作成を依頼する形で進められていた。調査の企画、実施、報告書の編集出版という一連の動きはおよそ10年間がかり、1836年ようやくスコットランド全域をカバーする調査報告書14巻が出揃えたという経緯がある。

OSA と NSA は産業革命期におけるスコットランドの社会経済的变化を検討するにあたって豊富な情報を持っているため、この研究領域では高い利用価値を持つ貴重な一次史料として知られている。ただし、多くの研究が指摘しているように<sup>5)</sup>、OSA と NSA の記述内容は主として教区牧師の執筆によるものであり、研究分析の基礎資料として利用する際

2) Whatley, *The industrial revolution*, p.3. スコットランド中西部地方 west-central Scotland というのはエア州 Ayrshire, ダンバートン Dumbartonshire, ラナーク州 Lanarkshire, レンフルー州 Renfrewshire を含めた地域を指すものである。

3) Arthur Geddes, 'Scotland's "Statistical Accounts" of Parish, County and Nation: c. 1790-1825 and 1835-1845', *Scottish Studies*, vol.3, part.1 (1959), pp.17-19. 新井 嘉之作「スコットランド先進地域における農業近代化の一段階 1790-95年のロジアン農業」『社会経済史学』第44巻第2号(1978年8月)4-5頁。

4) William Anderson, *The Scottish Nation; Surnames, Families, Literature, Honours, and Biographical History of the People of Scotland*, Division VIII(1876), Edinburgh and London: A Fullarton & Co., pp.463-470. A.Geddes, 'Scotland's "Statistical Accounts" of Parish', pp.19-20. 椎名重明『イギリス産業革命期の農業構造』御茶の水書房、1962年、9、19頁。

に、その宗教的視点、即ち内容の客観性や信憑性について夙に慎重な検討と細心な留意を払う必要がある。また、都市よりも農村に関する描写が多いこと、そして製造業よりも農業生産の状況に関する記述が詳細であることはこの史料の特徴であると同時に、本稿の課題からして利用上の制約要素とも捉えられるであろう。

上記した史料的性格と制約を勘案した上で、OSA と NSA の中に最も明確な数値の記載がある要素—人口数を抽出し、中西部地域の人口動向と人口分布に関する表を作成した。表 1 から表 4 までの 4 つの表は18世紀末と1830年代という 2 つの時期における各州の教区ごとの人口分布とその期間中の人口増減数を集計したものである。以下の叙述ではこの 4 つの表を分析資料として利用する。

### 3 . スコットランド中西部地域の人口動向と分布—州と教区に分けて

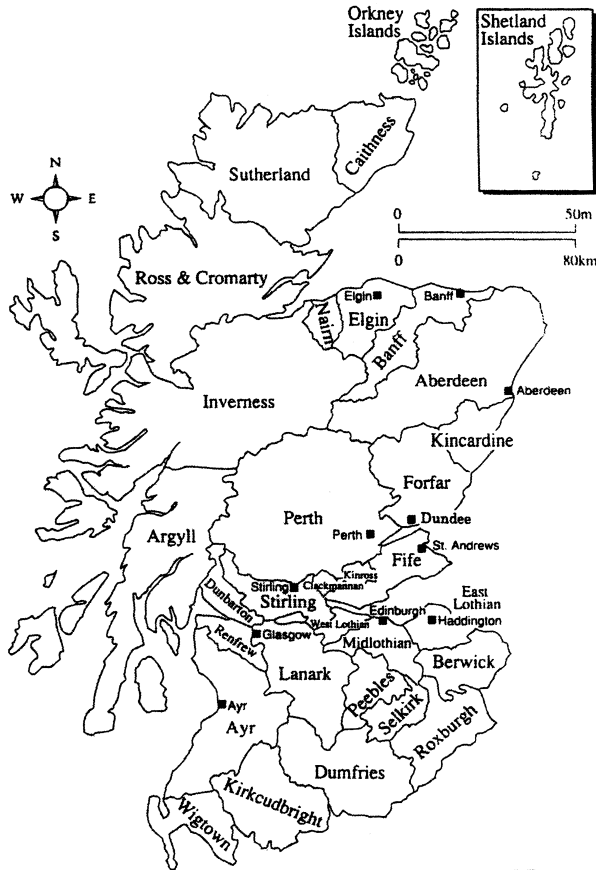
#### ① 各州の人口動向と分布

まず、表 1、表 2、表 3、表 4 をもとに、中西部地域における居住人口の分布と動向を確認しておこう。18世紀末には最も人口規模の大きい州はラナーク州で合計125254人の居住人口数を持っており、この人口数は1830年代になると319819人へと大幅な増加が見られた。ラナーク州に次いで、人口規模の大きな州はエア州である。この州では18世紀末に約75544人が居住していたが、30年近くが経過した後、居住人口数は137329人へと成長した。そして、レンフルー州の18世紀末の居住人口は62853人で、ダンバートン州のそれは18408人であり、1831年にはそれぞれ133643人と34396人へと居住人口が増加したことが窺える。

次に人口増加の規模と成長率を見ていく。18世紀末から1830年代までの時期において、中西部地域の人口増加数はそれぞれラナーク州が194565人、エア州が61785人、レンフルー州が70790人、ダンバートン州が15988人であった。この数値を分子に、18世紀末の居住人口数を分母にして人口成長率を算出してみると、上記の 4 つの州はそれぞれエア州が82%、ダンバートン州が87%、ラナーク州が155%、レンフルー州が113%という成長率で人口成長を成し遂げたことが分かる。これらの数値を図 1 で示している各州の面積の大体のイメージに照らし合わせて考えていくと、次のことができるであろう。面積が広く、居住人口の絶対数と人口成長率とも高い数値を示しているのはラナーク州である。この州では、グラスゴウ市の目覚ましい商工業活動の発展がラナーク州の高度な人口成長と人口集中に寄与した重要な要因の一つだと考えられる。また、エア州はその広い州面積に見合うような人口規模を持っていたが、人口増加数であれ、成長率であれ、いずれも州面積が遥かに狭いレンフルー州より低い数値を示していることが注目に値する。因みに、この二つの州が示している数値を比較して考えると、レンフルー州は比較的狭い州面積で多くの人口を定住させることができる経済力を持っていたこと、しかも19世紀前半期における製造業活動の進展に伴ってその経済力

5) 菊池 紘一「18世紀スコットランド地主と村落創設運動」『社会経済史学』第37巻第6号、1972年、2 - 5頁。新井嘉之作「スコットランド先進地域における農業近代化の一段階」、4 - 5頁。林 妙音「スコットランドの人口動向と繊維生産の地域分布 - 1755年から1831年まで」『大阪商業大学論集』第2巻 第1号(2006年7月)、32 - 33頁。

図1 1790年代におけるスコットランド各州、大都市の分布



出典：A. J. S. Gibson & T. C. Smout, *Prices, food and wages in Scotland 1550-1780*, Cambridge: Cambridge University Press, 1995, pxvi .

と人口規模が一層大きくなったことが推測できる。また、ダンバートン州は州面積が狭く、人口規模が四つの州の中で最も小さいのだが、居住人口は他の州と大体同じレベル範囲の成長率で増加していたことが看取できる。

② 州における教区ごとの居住人口と分布

表1が示すように、エア州では1790年代前半において居住人口が最も多かった教区の上位3位はKilmarnock6776人、Air教区4647人、Irvine教区4500人であった。その次に来る3000人規模の居住人口を擁する教区は2教区、2000人規模のそれは5教区に数えられる。この10教区を除いた州全体の人口分布としては、次のことができる。すなわち、18世紀末においてエア州では47教区のうち、約8割を占める37教区は1000人かそれ以下の数の人口しか居住していない地方の小さな町村であり、これらの教区の住民は農業・漁業・牧畜生産を主要な生計活動としていたことが考えられる。一方、人口増減の傾向に目を転じて、1830年代中葉までの人口増減数を規模順で並べ替えると、居住人口数が最上位のKilmarnock教区は最

表1 エア州 Ayrshire の教区ごとの人口分布（単位：人数）

教 区 名	1790年 - 1795年の 人口数	1831か1836年の 人口数	人口の増減数
Air	4,647	6,240	+ 1,539
Ardrossan	1,528	3,595	+ 2,067
Auchinleck	775	1,662	+ 887
Ballantrae	770	1,506	+ 736
Barr	750	941	+ 191
Beith	2,872	5,113	+ 2,241
Cimbraes	509		
Colmonell	1,100	2,213	+ 1,113
Coylton	667	1,389	+ 722
Craigie	700	824	+ 124
Cumnock, New	1,200	2,184	+ 984
Cumnock, Old	1,632	2,763	+ 1,131
Daily	1,607	2,074	+ 467
Dalmellington	681	1,056	+ 375
Dalry	2,000	3,841	+ 1,841
Dalrymple	380	964	+ 584
Dreghorn	830	888	+ 58
Dundonald	1,317	5,579	+ 4,262
Dunlop	779	1,040	+ 261
Fenwick	1,281	2,020	+ 739
Galston	1,577	3,655	+ 2,078
Girvan	1,725	6,430	+ 4,705
Irvine	4,500	5,200	+ 700
Kilbirnie	700	1,541	+ 841
Kilbride, West	698	1,684	+ 986
Kilmarnock	6,776	18,093	+ 11,317
Kilmaurs	1,147	2,130	+ 983
Kilwinning	2,360	3,778	+ 1,418
Kirkmichael	956	2,856	+ 1,900
Kirkoswald	1,335	1,951	+ 616
Largs	1,025	2,848	+ 1,823
Loudoun	2,308	3,959	+ 1,651
Mauchline	1,800	2,232	+ 432
Maybole	3,750	4,000	+ 250
Monkton	717	1,461	+ 744
Muirkirk	1,100	2,816	+ 1,716
Newtown on Ayr	1,689	4,020	+ 2,331
Ochiltree	1,210	1,562	+ 352

教 区 名	1790年 - 1795年の 人口数	1831か1836年の 人口数	人口の増減数
Riccarton	1,300	2,499	+ 1,199
St Quivox	1,450	1,146	- 304
Sorn	2,779	4,120	+ 1,341
Stair	518	737	+ 219
Stevenston	2,425	3,681	+ 1,256
Stewardton	3,000	4,503	+ 1,503
Straiton	934	1,377	+ 443
Symington	610	884	+ 274
Torbolton	1,200	2,274	+ 1,074
全教区の合計	75,544	137,329	+ 61,785

注

- 1) 教区名の綴り方は *The New Statistical Account of Scotland* の表記に従う。表2、表3、表4は同じ。
- 2) 1830年代の人口数に関しては、①1831年のみ記載 ②1836年のみ記載、③1831年と1836年両方の記載がある教区の3種類があるが、分類③の教区については1836年の人口数を採用する。
- 3) *The New Statistical Account of Scotland* では Cimbraes 教区の記載が存在していない。
- 4) *The New Statistical Account of Scotland, p.174.* Monkton 教区の1830年代における人口数は Monkton, Prestwick, Prestwick Toll の3教区の合計人口数である。

出所) Sir John Sinclair, *The Statistical Account of Scotland Drawn up from the Communication of the Minister of Different Parishes*, vol.20, (October 1798) pp.591-592. *The New Statistical Account of Scotland* by the Ministers of the Respective Parishes, under the Superintendence of A committee of the Society For the Benefit of the sons and daughters of the Clergy, Edinburgh and London: William Blackwood and sons, Vol.V. より筆者作成。

も多くの人口増加をなしとげた教区でもあったことが分かる。11317人という増加数は2位の Givan 教区の4705人、そして3位の Dundonald 教区の4262人から大きく引き離れていることは Kilmarnock 教区がエア州において特殊な位置づけと発展経路を持っている可能性が大きいことを示唆している。なお、1830年代に関しては、居住人口10000人規模は1教区、6000人規模は2教区、5000人規模は3教区、4000人規模は4教区、3000人規模は6教区、2000人規模は12教区、1000人規模は12教区、1000人未満の規模は6教区というような大まかな分類ができる。1830年代まで進んできて、9割近くの教区では1000人以上の人口が定住するようになったことと、教区ごとの平均人口数が増加したことがこの州に起きた新しい変化として捉えることができよう。

12教区しか持たないダンバートン州の人口分布としては、18世紀末には居住人口2000人規模は5教区、1000人規模は3教区、1000人未満の規模は4教区があり、1830年代になると居住人口5000人規模は2教区、3000人規模は5教区、2000人規模は1教区、1000人規模は1教区、1000人未満の規模は3教区があるというような分類で州全体の人口分布像をまず把握しておきたい。ダンバートン州の南側はグラスゴウ市に隣接し、市の周辺外業部として製造業活動を行っていた村落や町が多く、その結果1830年代には多くの教区では2000人以上の人口が居住するようになったと考えられる。この中に人口増加が顕著な教区として Kilpatrick,



表2 ダンバートン州 Dumbartonshire の教区ごとの人口分布（単位：人数）

教 区 名	1790年－1798年の 人口数	1831年の人口数	人口の増減数
Arrochar	379	560	+ 181
Bonhill	2,310	3,874	+ 1,564
Cardross	2,194	3,566	+ 1,372
Cumbernauld	1,600	3,080	+ 1,480
Dumbarton	2,003	3,623	+ 1,620
Kilmarnock	820	999	+ 179
Kilpatrick, New	1,700	3,000	+ 1,300
Kilpatrick, Old	2,452	5,879	+ 3,427
Kirkintilloch	2,639	5,888	+ 3,249
Luss	917	1,181	+ 264
Roseneath	394	709	+ 315
Row	1,000	2,037	+ 1,037
全教区の合計	18,408	34,396	+ 15,988

出所：J.Sinclair, *The Statistical Account of Scotland*, vol.20, (October 1798) p.600. *The New Statistical Account of Scotland*, vol.VIII, p.24.

New 教区と Kilpatrick, Old 教区が浮かび上がってくるであろう。この二つの教区とも州全体において人口規模が最も大きく、人口増加の絶対数も他の教区のそれを抜き出していることから、人口規模と人口成長との間に正の相関関係があることが考えられる。ちなみに、上記のエア州においても、同様の傾向が観察されている。

続いて、人口成長と産業発展両面で最も優れた進捗を見せたラナーク州の人口分布について見ていく。表3から分かるように、1790年代においてこの州で最も多くの居住人口数が見られたのは Glasgow & Barony の58401人であり、その次は Gorbals & Govan 教区の9066人、Hamilton 教区の5017人、Monkland, Old 教区の4000人の順になっている。この4教区以外の38教区の中に、3000人規模の教区は3つ、2000人規模の教区は4つ、1000人未満の規模の教区は31という大まかな分類ができる。前述したエア州と同様に州面積の広いラナーク州では、18世紀末において半数以上の教区は1000人以下の居住人口規模であったが、この州は内陸州であるため、住民の大多数は主として農業や牧畜生産に従事していた可能性が大きいと考えられる。人口増加の教区ごとの動向に関しては、Glasgow & Barony 教区は最も大規模な人口増加が見られた地区であったことはとりたてて驚くべきことでもないであろう。Gorbals 地区の編入によって144025人という数値は正確なものより若干の膨張があると思われるが、スコットランド全域において最も大きな人口増加数であることはまず間違いないであろう。グラスゴウ市に次いで、人口数が大幅に増加した教区とそれぞれの人口増加数は Monkland, New 教区の6307人、Monkland, Old 教区の5580人、Hamilton 教区の4496人、Rutherglen 教区の3643人であった。ラナーク州もこのように前述した2つの州と同様に、人口規模が大きい教区の方が顕著な人口成長を成し遂げる例証となるであろう。なお、1831年に31万人を上回る人口が居住するようになったラナーク州においては、20万人規模の

表3 ラナーク州 Lanarkshire の教区ごとの人口分布(単位:人数)

教 区 名	1790年-1798年の 人口数	1831年人口数	人口の増減数
Avondale	3,343	5,761	+ 2,418
BertramShotts		3,220	+ 3,220
Biggar	937	1,915	+ 978
Blantyre	1,040	3,000	+ 1,960
Bothwell	2,707	5,545	+ 2,838
Cadder	1,767	3,048	+ 1,281
Cambuslang	1,288	2,697	+ 1,409
Cambusnethn	1,684	3,824	+ 2,140
Carluke	1,730	3,288	+ 1,558
Carmichael	781	956	+ 175
Carmunnock	570	692	+ 122
Carnwath	3,000	3,505	+ 505
Carstairs	924	981	+ 57
Covington	484	521	+ 37
Crawford	1,490	1,850	+ 360
Crawfordjohn	590	991	+ 401
Culter	326	497	+ 171
Dalserf	1,100	2,680	+ 1,580
Dalziel	478	1,180	+ 702
Dolphinton	200	275	+ 75
Douglas	1,715	2,549	+ 834
Dunsyre	360	335	- 25
Glasford	788	1,730	+ 942
Glasgow & Barony	58,401		
Glasgow,Barony & Gorbals		202,426	+ 144,025
Gorbals & Govan	9,066		
Govan		4,967	- 4,099
Hamilton	5,017	9,513	+ 4,496
Kilbride, East	2,359	3,789	+ 1,430
Lammingtoun	417	382	- 35
Lanark	4,751	7,672	+ 2,921
Lesmahago	2,810	6,409	+ 3,599
Libberton	750	773	+ 23
Monkland, New	3,560	9,867	+ 6,307
Monkland, Old	4,000	9,580	+ 5,580
Pettinain	386	461	+ 75
Roberton	740	940	+ 200



教 区 名	1790年－1798年の 人口数	1831年人口数	人口の増減数
Rutherglen	1,860	5,503	+ 3,643
Bertram Shotts	2,041	3,220	+ 1,179
Stonehouse	1,060	2,359	+ 1,299
Symington	307	489	+ 182
Walston	427	429	+ 2
全教区の合計	125,254	319,819	+ 194,565

注：

- 1) 1831年における Conbington 教区の人口数は Covington と Thankerton が統合して出来上がった教区の人口数である。
- 2) 1831年における Lammington 教区の人口数は Wandell と Lammington が統合して出来上がった教区の人口数である。
- 3) 1831年における Liberton 教区の人口数は Libberton と Quothquan が統合した出来上がった教区の人口数である。
- 4) 1831年における Roberton 教区の人口数は Wiston と Roberton が統合して出来上がった教区の人口数である。

出所：J.Sinclair, *The Statistical Account of Scotland*, vol.20. (October 1798) pp.609-611. *The New Statistical Account of Scotland*, vol.VI, p.960.

教区は1つ、9000人規模は3つ、7000人規模は1つ、6000人規模は1つ、5000人規模は3つ、4000人規模は1つ、3000人規模は8つ、2000人規模は4つ、1000人規模が4つ、1000人未満の規模は15があるというような分類で、この州の人口集中と分布の大まかなイメージを把握しておきたい。表3とこの分類から、1831年において各教区の居住人口数が確実に大きくなったことと、5000人以上の居住人口を持つ教区の数に関しては、ラナーク州の方が中西部地域で最も多かったことを読み取れる。

最後に、表4が示しているレンフルー州の人口分布について確認する。この州では18世紀末に最も多くの人口数－15000人が居住していたのは港地区のGreenockであった。その次は繊維生産地区のPailseyとPaisley Abbeyであり、それぞれ13800人と10792人程度の居住人口を擁していた。この3教区を除いて他の17教区の人口規模の分類としては、4000人規模は1教区、2000人規模は4教区、1000人規模は5教区、1000人未満の規模は4教区となっている。レンフルー州は中西部地域の4つの州の中で最も人口密度が高い州であったことを反映しているかのように、18世紀末には州人口の6割強が上記した3つの教区に集中して居住していたことが表4から窺える。一方、人口増加に関しては、上記同様の3つの教区が最も目を見張る数字を示している。即ち、Greenock教区は12571人、Paisley教区は17660人、Paisley Abbey教区は15414人という人数での人口増加が見られたのである。そして、1831年における教区ごとの人口規模としては、3万人規模の教区は1つ、2万人規模は2つ、8000人規模は1つ、6000人規模は1つ、5000人規模は1つ、4000人規模は2つ、2000人規模は6つ、1000人規模は1つ、1000人未満の規模は5つがあるという分類ができる。

この時期に中西部地域の多くの地方では製造業活動が発展し、それに関連して多くの種類の工業原料や工業製品がクライド川の河口港であるGreenockから輸出入されていた。

表4 レンフルー州 Renfrewshire の教区ごとの人口分布(単位:人数)

教 区 名	1790年-1798年の 人口数	1831年人口数	人口の増減数
Beith		65	+ 65
Cathcart	697	2,082	+ 1,385
Dunlop		56	+ 56
Eaglesham	1,000	2,372	+ 1,372
Eastwood	2,642	6,854	+ 4,212
Erskine	808	973	+ 165
Govan		710	+ 710
Greenock	15,000	27,571	+ 12,571
Houston	1,034	2,745	+ 1,711
Inchinnan	306	642	+ 336
Innerkip	1,280	2,088	+ 808
Kilbarchan	2,506	4,806	2,300
Kilmalcolm	951	1,613	+ 662
Lochwinnoch	2,613	4,515	+ 1,902
Mearns	1,430	2,814	+ 1,384
Neilston	2,330	8,046	+ 5,716
Paisley	13,800	31,460	+ 17,660
Paisley Abbey	10,792	26,206	+ 15,414
Port-Glasgow	4,036	5,192	+ 1,156
Renfrew	1,628	2,833	+ 1,205
全教区の合計	62,853	133,643	+ 70,790

注:

- 1) The Statistical Account of Scotland では、Beith, Dunlop, Govan の3教区の記載が存在していない。
- 2) 1831年における Houston 教区の人口数は Houston と Killallan が統合して出来上がった教区の合計人口数である。

出所: J.Sinclair, *The Statistical Account of Scotland*, vol.20. (October 1798) p.615. *The New Statistical Account of Scotland*, vol.VII, p.555.

日々増大する商品流通を担うためには、それだけの労働力が必要であった。このような港湾労働を主体とする雇用機会を求めて、Greenock にはハイランドを含む多くの地域から労働者とその家族たちが移住して来た。また、Paisley は熟練度の高い織布技術を持つ職人が多く居住している教区であり、多くの資本が良質な労働力を求めてこの教区にやってきて、高級綿布の生産事業を営んでいた。Paisley はこの時期にモスリンを代表とする高級綿織物の生産地としてその地位と名声を次第に確立していった。レンフルー州における人口成長は Greenock と Paisley という2つの教区が典型として示しているように、製造業とそれに関連する商品流通の成長によって牽引されてきた傾向があることができる。

**参考文献：**

1 英語文献：

- Henry Hamilton, *The Industrial Revolution in Scotland*, London:Oxford University Press, 1932, as  
Mark Casson (ed.), *Entrepreneurship and the Industrial Revolution*, Vol. III, London :  
Routledge/Thoemmes Press, 1996.
- Arthur Geddes, 'Scotland's "Statistical Accounts" of Parish, County and Nation: c. 1790-1825 and  
1835-1845', *Scottish Studies*, vol.3, part.1 (1959).
- T.C.Smout, *A History of The Scottish People 1560-1830*, London : Fontana Press, 1969.
- C.A.Whatley, *The Industrial Revolution in Scotland*, Cambridge: Cambridge University Press,  
1997.
- T.M.Devine, *The Scottish Nation 1700-2000*, London : The Penguin Press, 1999.
- T.M.Devine and J.R.Young (eds.), *Eighteenth Century Scotland : New Perspectives*, East Linton :  
Tuckwell Press, 1999.
- C.A.Whatley, *Scottish Society 1707-1830 : Beyond Jacobitism, towards industrialisation*,  
Manchester and New York: Manchester University Press, 2000.

2 邦語文献

- 椎名 重明 『イギリス産業革命期の農業構造』 御茶の水書房、1962年。
- 菊池 紘一 「18世紀スコットランド地主と村落創設運動」 『社会経済史学』 第37巻第6号、1972  
年、2 - 5頁。
- 新井 嘉之作 「スコットランド先進地域における農業近代化の一段階 1790 - 95年のロジアン農業  
」 『社会経済史学』 第44巻第2号 (1978年8月)
- 北政巳 『近代スコットランド社会経済史研究』 1985年、同文館。
- S.D. チャップマン(佐村 明知訳) 『産業革命のなかの綿工業』 晃洋書房、1990年。
- 小林 照夫 『スコットランド首都圏形成史 - 都市と交通の文化史論』 成山堂書店、1996年。
- 北 政巳 『スコットランド鉄道・海運業史』 御茶の水書房、1999年。
- 北 政巳 『スコットランド・ルネサンスと大英帝国の繁栄』 藤原書店、2003年。
- 林 妙音 「スコットランドの人口動向と繊維生産の地域分布 1755年から1831年まで」 『大阪商業  
大学論集』 第2巻 第1号 (2006年7月)。

